

<日本レジャー・レクリエーション学会第 40 回学会大会 学生セッション>

学生セッションを終えて

脇谷 翔太郎¹

“JSLRS students” session

Shotaro Wakiya¹

1. 概要

本年で第 40 回目となった日本レジャー・レクリエーション学会の学会大会では、学生間の交流を図ることを目的とした「学生セッション」が行われた(第 3 日目：2010 年 11 月 28 日(日) 14:30 ~ 15:50)。そもそも当学会の大会では、毎年学生の参加が見受けられるものの、学生間での交流の機会は自発的なものに限られており、数年前より、学生の交流の場を作ろうとの声が挙がっており、この度企画された。ポスター発表が盛況に行われた影響で、続く当企画への学生の参加に懸念が生じたものの、蓋を開けてみれば 20 名弱の学生が集り、なんとか幕は降りた。

今回のセッションの形式はワールドカフェの手法を取り入れて行った。ワールドカフェとは人々がカフェにある空間のようなオープンで創造性に富んだ会話ができる場とプロセスを用意するもので、コミュニケーションを促すようなプロセスが特徴的である。具体的な方法としては、飲食を楽しみながらテーブルごとのトピックを話し合い、おおよそ 15 分ごとにテーブルへ 1 人残り他の人は他のテーブルへ移動する。テーブルに集ったら、テーブルに残ってた人が前のラウンドで話していた内容を新しいメンバーに説明し、再度新たなメンバーでトピックついて話し合い、その都度、話し合った内容をテーブルに敷かれた模造紙に自由に書き込み、最後の時間でそれぞれのテーブルごとの発表を行う、という一連の流れで行った。1 テーブル 5, 6 人程度のグループで、全 3 グル

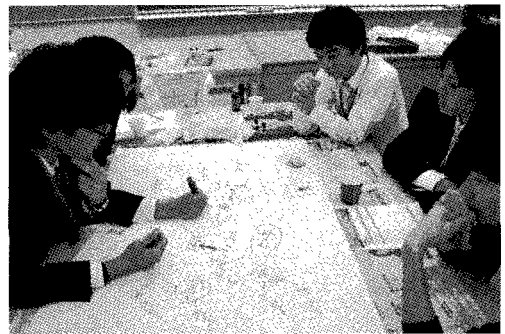


図 1 セッションの様子

ブ作った。こちらで用意したテーマは「学会における学生のコミュニティづくり」という大きなテーマのなかで、「現在あなたが所属しているコミュニティから、何を得ているか」といったコミュニティについてのトピックを複数用意した(図 1)。

2. 話し合われた内容(図 2, 3, 4 ならびに表 1)

コミュニティづくりをテーマとして話し合うなかで、どのグループにも共通していた課題のひとつに「発信方法」がある。その内容は、研究領域や学会の活動内容、魅力的なテーマ設定、などである。学生の多くは学会への参加経験が少ない者だったせいも、そもそも学会とは学生にとってどういった意味があるのか、を再認識する良い機会になったように思う。次に出てきたのは「参加学生の確保」であった。あるグループは参加のプロ

1 東京農業大学地域環境科学部
Faculty of Environmental Science, Tokyo University of Agriculture

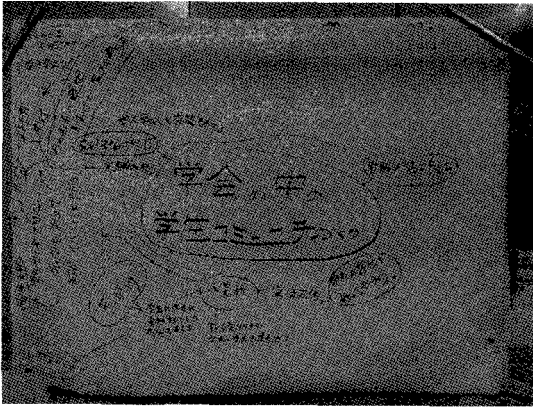


図2 発表時にまとめた成果品①

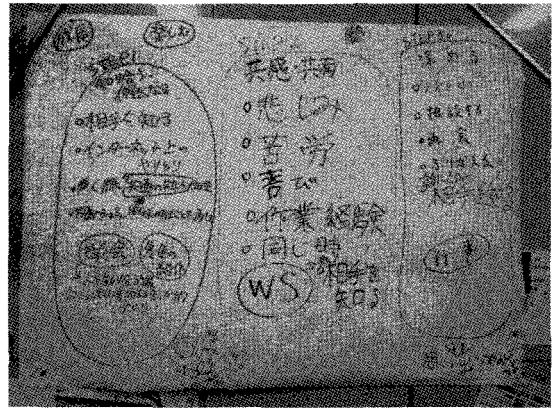


図4 発表時にまとめた成果品③

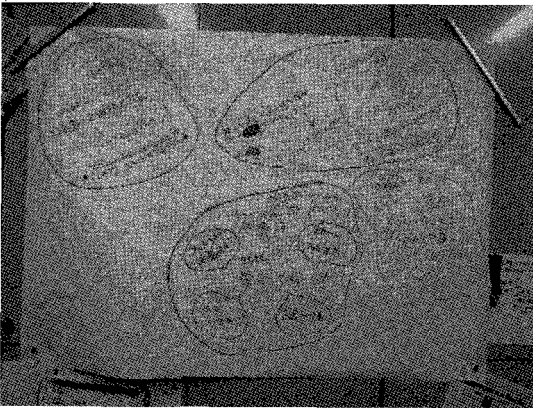


図3 発表時にまとめた成果品②

セスについて最後まで話し合い提案していたグループもあり、今後の学生コミュニティづくりの際に参考にできるのではないかと思います。また参加学生にインセンティブを与える具体例として、学会への参加による単位認定や研究旅行、魅力的なテーマを設けたイベントの開催等が挙げられた。また、今回はコミュニティづくりに際したプロセスに関する話ばかりで、肝心のコミュニティについての話が少なかったことが残念に思われる。

3. 今後に向けて

今回の学生セッションはファシリテーターの準備が行き届かない点があり、参加者に対して不自由な思いをさせてしまった。しかしながら、加えて予定していた時間より大幅に短くなってしまったのにも関わらず、学生たちは率直な意見を素直に出してくれたように感じる。最後に、今回のセ

表1 発表時の成果品から抽出した事項

様々なレベル	内容
①学会の発信	研究領域、活動内容の公表 インターネットの活用 イベントの活用
②参加学生集め	インセンティブを明らかにする 研究旅行などイベントに絡める 学生が参加しやすいプログラム
③参加のプロセス	知り合う機会・きっかけをつくる 共感・共有の機会をつくる 「回る」システムをつくる

表2 学生セッションでの
成果をもとに案出した今後の課題

【学会における学生コミュニティづくりを考える上での3つの課題】
① 研究領域の透明化
② 交流の機会の創出
③ 学生にとってのインセンティブの確保
④ コミュニティの目的の明確化ならびに持続的なシステムづくり

ッションで参加者達が出してくれた意見をもとに、今後の課題を私なりに案出してみた(表2)。

学会におけるコミュニティづくりに向けて、まず「研究領域の透明化」を挙げた。日本レジャー・レクリエーション学会は、関わる研究者の領域が多岐に渡る反面、外部に学会の内容が伝わりにくい現状があり、今回の学生セッションでもこの点が挙げられた。加えて、今回、ポスター発表

の形式が変わり、学生と先生方との交流の機会は増えたものの、参加した学生同士の交流の機会は大変貴重であった。よって、2番目の項目として「交流の機会の創出」を挙げたい。しかし、今回の参加者が大会関係者の学生に偏っていたため、内向きの議論にならざるを得なかった点も今回挙げられるだろう。さらに、学生にとって他大学生との交流が深まり、勉強の意欲が深まれば幸いだ、そもそも参加をどう促すか、「学生にとってのインセンティブの確保」が求められる。この項目について学生セッションでは、研究旅行などのイベントや学会参加による単位認定といったかたちで挙げられたが、段階的にプログラムを構築する必要がある。最後に、「コミュニティの目的の明確化ならびに持続的なシステムづくり」という

課題を挙げたい。これは、コミュニティづくりを行っていく上では、どういったコミュニティをつくっていききたいかというビジョンをまず描き出すことがなにより重要ということである。今回のセッションではこの点が十分に議論されるに至らなかったことが悔やまれるが、この点をより議論できる機会を創出することがこれから求められていくように思われる。

謝辞

今回の学生セッションの企画を考えるにあたっては江戸川大学の土屋薫氏に、またワークショップの進行については東京農業大学源流大学(GP)事務室の矢野加奈子氏の両者に大変お世話になった。末筆ながらこの場を借りてお礼を申し上げたい。